

安春川の水辺空間の整備

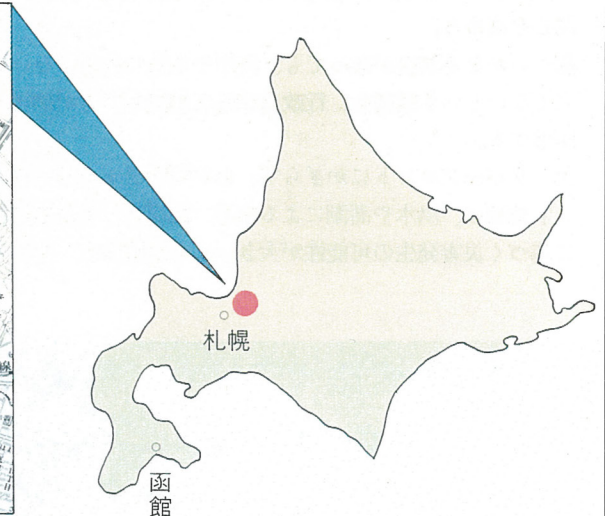
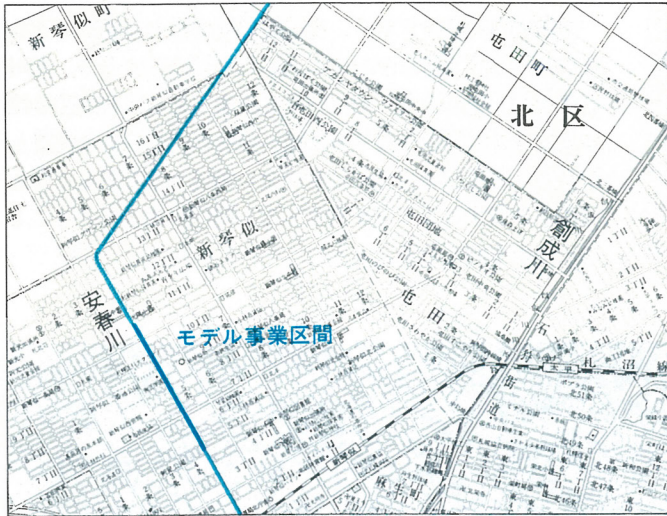
札幌市交通局次長(前札幌市建設局土木部長) 三海 弘

はじめに

札幌の地名はアイヌ語のサリ・ポロ・ベツ(乾いた・大きな・川)、すなわち、母なる川豊平川に由来している。その昔、開拓使が未開の地に鋤を入れた頃、豊平川は現在の南区真駒内の辺りで幾筋もの支線に分かれ、曲りくねりな

災害防止、大気の浄化、レクリエーション施設などの機能において、快適な都市生活に不可欠の環境的要件として位置づけられる。

このような市街地を取り囲む自然緑地は、かけがえのない財産として後世に継承するとともに、今後の街づくりに



が流れ、時には姿を消し、再びヌム(湧水池)として現れ、新たな川筋をつくり流れてるなど、壮大な扇状地を形成していたと記録されている。このように札幌の街は豊平川の扇状地に生まれ、母なる川の豊富な水に支えられて育った。

この恵まれた水資源は、飲料水・舟運・あるいは田畑の灌漑用水として利用され街の発展の礎となってきたが、しかし、川は恩恵ばかりを与えてはくれなかった。豊平川をはじめ多くの川は大変な暴れ川で毎年のように氾濫を繰り返し、開拓の歴史はまさに川との壮絶な闘いであった。私達の先人は度重なる水害を防ぐため川筋にある障害物を取り除き、曲りくねった川を真直ぐに切り替え、堤防を築き、川と川を結ぶ新しい運河を掘り、また、湿原や泥炭地には多くの排水路をつくるなどして川を治めてきた。

こうして札幌の地は実り豊かな大地へと変わり、僅か120年で人口160万人を擁する北海道の政治、経済、文化の中心都市として大きく成長してきたのである。

札幌は広大な市域を有し市街地の周辺には今なお緑豊かな自然環境が広がっている。この豊かな緑は、水源の涵養、

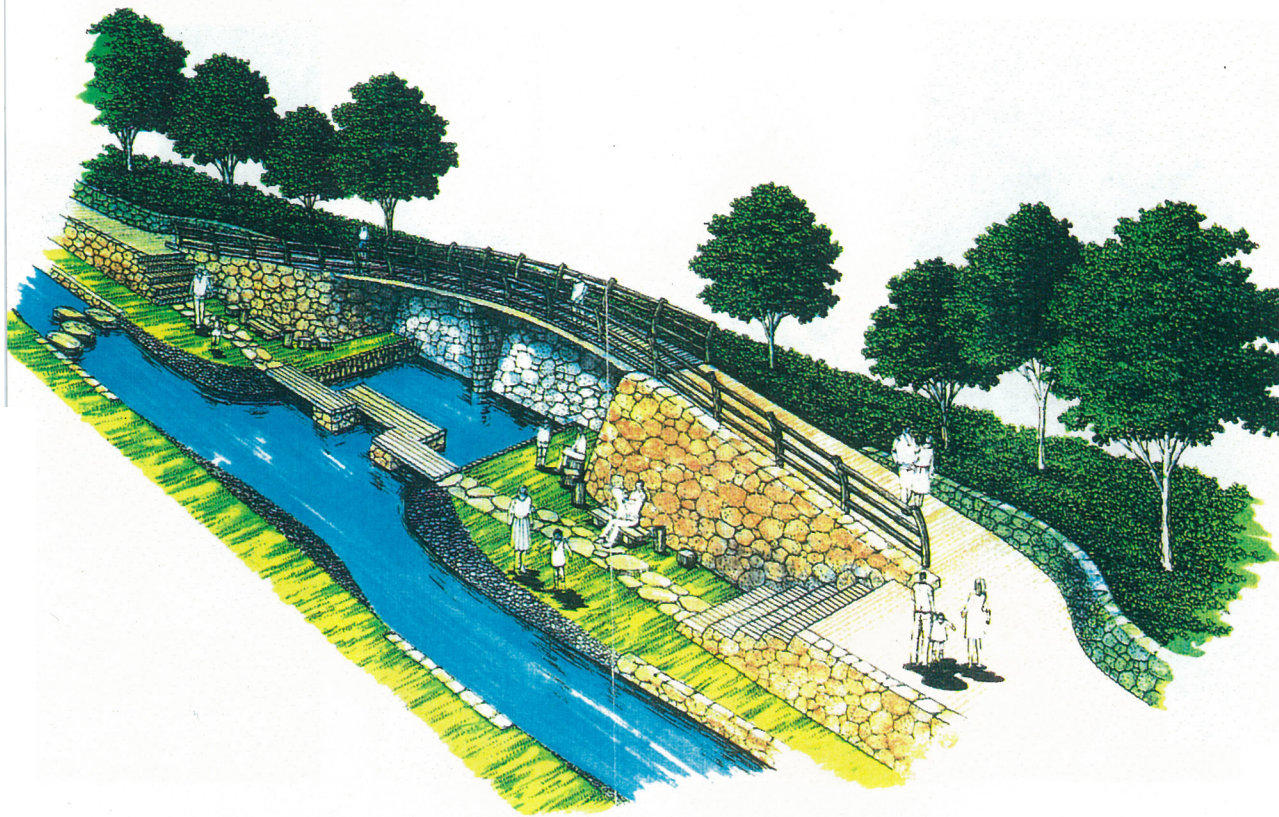
積極的に生かして行くことが重要であると考えており、とりわけ最近の河川事業においても、市民のニーズと相まって、これらの視点を十分に考慮した施策の展開を実施するよう求められているところである。

安春川の概要

安春川は札幌開拓史上、創成川と並び北区新琴似地区の先駆者達を偲ぶシンボルとなっている川である。

この新琴似地区は明治20年に琴似村内の未開拓地に屯田兵村として創設されたのが初めて、当時のこの一帯は地名「琴似」のアイヌ語コツ・ネイ(低く窪んだところ)の意味するように低湿地で開墾は非常に困難を極めた。そこで屯田兵の責任者である中隊長安藤大尉は明治23年湿原の地下水位を下げ、農作業の効率化と農作物の増産を目指して大排水路の開削を行った。

その工事は当時さまざまな困難を伴うものであったことから、先人達はこの功績を讃え、完成の際安藤大尉の「安」と工事の請負者春山某の「春」をとって安春川と名付けたのである。その後、こうした先人の営々たる努力のもと次々と開墾が進められ、現在の札幌の中核地域へと発展してきた。



このように安春川は屯田兵によって造られた灌漑用排水路であったが、しだいに発寒川、茨戸川を経て石狩川に流れこむ流域面積4.2km²、流路延長5.2kmの都市河川へとになっていった。さらに、昭和40年代市域の発展に伴い当該流域も急速に宅地化が進み、流域市街地の雨水排除としての機能だけの河川となってきた。

こうした推移のなかで昭和39年の台風7号、昭和40年と流域の急激な都市化に伴う負担に堪えかね連続して浸水被害をだした。本市ではこれに対応すべく単独費で一部区間の整備を開始したが、その後、都市小河川改修事業（昭和47年）に採択され、また、昭和54年からは伏籠川総合治水対策事業の関連河川としての位置づけになったこともあって、昭和61年度末までに全体計画の約82%が整備の完了をするに至っている。

新琴似ウォーターフロントベルト構想

札幌市では都市施策として「緑豊かなうるおいのある街づくり」を目指し、市街地に緑と水辺を呼び戻し人と自然とがふれあい、かつ、うるおいのある都市環境を提供することを基本目標としている。また、新琴似地区は西に安春

川、東にポプラ通り、南に JR の札沼線が通り、屯田西公園、グリーン公園等の都市環境の向上に必要な拠点的な緑地空間や光陽小・中学校をはじめとする文教施設が多い地域でもある。このため、同地区においてもこれらの施設を有機的に活用した街づくり構想があり、これを「新琴似ウォーターフロントベルト構想」と呼んでいる。この内容としては、水辺と緑豊かな都市空間をネットワーク化し、周辺地区の人達にもうるおいと憩いの場を提供するなど、都市環境の質的向上を図ることを掲げ快適で緑豊かな街づくりを目指したものである。その地域特性を活した区分では、安春川沿線・ポプラ通り・札沼線沿線の3つに分類をして次のように位置づけをしている。

- (1) 安春川沿川下流ゾーン及び上流ゾーン（河川軸景ゾーン）

安春川と並行する道路を有機的に取り込み、緑豊かなうるおいのある水辺空間を創造し、かつ、人と自然とがふれあえるリバー・プロムナード。

- (2) ポプラ通りゾーン（自然緑地景観ゾーン）

防風林であるポプラ並木を生かし、緑と人がふれあ



- える大規模なグリーンベルト・プロムナード。
- (3) 札沼線沿線ゾーン（公園緑地景観ゾーン）
 安春川沿川、ポプラ通りゾーンへのアクセスゾーンとして、また、公園等の公共空間を利用したの散策、サイクリング、ジョギングのできるパーク・プロムナード。

ふるさとの川安春川の水辺空間整備方針

今回、ふるさとの川モデル事業の認定をいただいたこの区間は、先に記した構想のなかの安春川沿川ゾーンの最上流付近に位置する。この街づくり構想の中で「ふるさとの川」としての安春川を見直し、その水辺空間のもつ役割、価値に着目しながら、地域の街づくりと一体となった河川整備を考慮して次のような水辺空間整備方針を策定した。

- 新琴似屯田兵開基100周年を記念して「先人の苦労を偲ぶリバー・プロムナード」をテーマとする。
- 安春川の水と緑を軸にした市民の憩いの場を創造する。
- 安春川を軸とした空間を市民の交流の場とする。
- 下水道事業における高度処理水の導水計画、融雪溝計画（「アメニティ下水道モデル事業」）および、道路事

業におけるコミュニティ道路整備計画と連携し、地域の街づくりと一体となった整備を図る。

- 安春川と並行する道路、横過する橋梁等を河川施設により有機的に関連づけ、うるおいとやすらぎのある水辺空間を演出する。

ふるさとの川安春川の水辺空間整備計画

これらの整備方針を踏まえて安春川の水辺空間整備計画は次のように定めた。

(1) 河道形態のイメージ

河岸と河床やせせらぎの一体感、そして危険感がなく緩やかで、かつ、変化に富む断面景観、適当な奥行感の演出等を考慮して河道断面、法線を決定する。また、適当な間隔で人が集まり休憩できるスペースを配置する。

(2) 河道断面形状

水に触れ、水辺に親しむことが容易であり、また、清流、河床、散策路、河岸に対して距離感がなく一体となった景観をだすために複断面とする。

(3) 水辺空間を構成する施設

ア. 護岸



経年的には凹部にシダ類の植物が自生し、若干の被緑が期待でき、落ち着いたイメージとなるよう低くて緩い勾配の自然石積工とする。

イ. 親水広場

水辺に親しみ、休憩する広場は景観や散策にアクセントを持たせる意味で不可欠なものである。その配置は水と緑の景観での趣きを考慮し100から150m程度の間隔で両岸に交互配置とする。

ウ. 水遊び河道広場

河道は緩やかな蛇行河道とし、また、多数の子供が集まり賑やかに遊ぶ河道広場をポイント的に設置する。

エ. 散策路

高水敷に石張の散策路を設け、人と人、また人と自然とのふれあいの場所とする。

オ. 休憩広場

散策途中の休憩に語らいの広場を配置し、ベンチ、パーゴラ、四阿等の施設を設置する。

(4) 植樹

都市の緑化整備で留意することは周辺景観に埋没し

ないだけの緑の空間をつくることであるが、ここでは河川の整備目的を配慮して河岸には低中木を中心にした植樹を行いポイント的に高木を配植した緑の空間をつくる。

(5) 関連事業

ア. コミュニティ道路

両岸に並行する市道は水辺と緑の景観を構成する一つの要素として位置づけ、歩行者と車が共存するコミュニティ道路として河川事業に合わせた一体的整備を図る。

イ. 横過する橋梁

水辺空間を横過する橋梁は景観上重要な素材であり、歩道部を広く取り、植樹、デザイン高欄、テラス等を設け人と人がふれあえる広場とする。

あとがき

これらの整備計画に基づき関係機関の絶大なるご協力をいただきながら、昭和62年度より事業に着手をし、完成後は緑とせせらぎのある川として市民に親しまれ、愛される水辺の環境になるものと今から平成3年度の完成が待ち望まれているところである。